神様の顔を見る

創世記 32 章 23 節～33 節

2025 年 8 月 17 日

松田　基子師

聖書は、私たち人間は神様に対して罪を犯していると教えています。聖書が教える罪とは、神様の御心、ご意志に背くことです。しかし、生まれながらに自己中心で生きる性質を持つ人間は、おのずと自己中心に生きて、自分が神様に背いているということを自覚できないでいます。

罪が分かるのは、神様に出会って、神様の愛、聖さ、正しさ、憐れみに気付いた時に、自分の自己中心の姿が影となって映し出されます。その影を見て、自分の罪深さが自覚できるのです。神様の愛と憐れみの光を、強く感じれば感じる程、自分の罪深さの影は、濃く意識されます。

私たち人間は、自分のその姿が分かって初めて、罪を自覚すると共に、その救いは人間には無く、神様に赦しを求める以外に無いことに気付くのです。

そして、神様に赦されることこそ、人間が神様から受ける最高の祝福であることが分かるのです。神様はそのことを、聖書に登場する人々を通して教えておられます。

今朝は、ヤコブを通してそのことを知りたいと思います。

さて、ヤコブは双子で生まれました。それも後から取り上げられた為に、自分は弟とされましたが、弟故に家督を継ぐことが出来ないとされた古代の慣習に逆らって、家督を奪い取った人物です。

しかし、それは神様の御心を求めて従ったのではなく、兄の弱みにつけ込み、時を狙って父を騙し、兄を出し抜くと言った方法で奪い取りました。

ヤコブは、自己本位で、兄の怒り、自分への憎しみ、そして我が子に騙された父の驚きと悲しみを思いやることの出来ない人間でした。

家族の許(もと)に居られなくなったヤコブですが、伯父ラバンの許への逃亡も、母リベカからエサウの殺意を知らされ、**「エサウの怒りが治まるまで、伯父さんの所に置いてもらいなさい」**と勧められたからでした。

そんなヤコブであるにもかかわらず、神様は荒野の孤独な一人旅の中、ベテルにおいて御自身を示されましたが、その時、そんな彼を諌める言葉は一言も無く、

「わたしはあなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。この土地を与え、子孫を増やす。あなたと共にいる。この土地に連れ帰るまで見捨てない」との約束を与えられたのでした。

ここで疑問に感じる事は、神様はヤコブを生まれる前から選んでおられたにしても、何も諌めずこのままにしておいて、ヤコブは祝福の担い手になれるのだろうかという心配です。

しかし、罪を自覚し、赦しを求めることは、外から強いられて出来るものではありません。神様は自発性を重んじられます。そこで神様は、自分の罪に向き合おうとしないヤコブを、狡猾な伯父ラバンの許で 20 年間訓練されるのです。

ラバンは自分の娘たちさえ、自分の利益の為に利用するという、ヤコブに増してずる賢い人

間でした。ヤコブは20年間、ラバンに都合よく利用されました。ヤコブは自分が被害者になって初めて、利用され欺かれることの悔しさ、憤りを経験しました。

そこで神様は**「ヤコブ、これが、お前が兄エサウ、父イサクに与えた苦しみだ。お前は酷いことをしたのだ。少しは分かったか」**とは言われませんでした。神様はヤコブに味方して下さり、ラバンが自分に有利に、ヤコブに不利なように報酬を変えると、状況を逆転させて、ヤコブの報酬が増して行くようにしてくださいました。

ヤコブはそこで、人の力を超えて働いてくださる神様の、自分に対する慈しみを知り、神様への信頼、信仰を身につけていきました。ヤコブの落ち着きと反対に、ラバン親子はヤコブへの苛立ちをつのらせました。争いが起こる事が懸念されました。

そのような時、神様はヤコブに

「あなたは、あなたの故郷である先祖の土地に帰りなさい。わたしはあなたと共にいる」（創世記31章3節）と御声をかけられました。ヤコブは帰郷への決心をすると、ラバンに気付かれないように、彼が羊の毛を刈る一番忙しい時を狙って、全家族、全財産を携えて脱出しました。しかしラバンの追跡を受けました。その危機に、神様はラバンに

「ヤコブを一切非難せぬように」(創世記31章29節）とのお告げを与えて守られました。神様はその後、ヤコブに天の陣営の幻を見せて旅を導かれました。

一行はやがてヨルダン川東岸に辿り着きました。これからヨルダン川を渡れば故郷の地です。両親はどうしているだろうか。懐かしさがこみ上げてきました。と同時に不安に襲われました。待ち受けているのは兄エサウの存在です。

ヤコブはこれまでの半生を振り返って、自分がいかに自己中心な人間であったか、エサウが自分を殺したくなる程の憎しみを抱いた気持ちが分かるようになっていました。兄エサウは、まだ自分に対する憎しみ、殺意を抱いているだろうか。

罪というのは、時間が経てば消えて無くなるというものではありません。どこまでも追いかけ、責め立ててくるのです。

ヤコブはエサウの様子を知りたくて、彼の許に使いを出し、ご機嫌伺いを立てました。使いの者は帰ってくると、エサウがヤコブを迎えるために、400人の従者を引き連れてこちらに向かっていると言うではありませんか。

ヤコブは不安に襲われ、神様に助けを求めずにはいられませんでした。ヤコブは祈りました。

「わたしの父アブラハムの神、わたしの父イサクの神、主よ、あなたはわたしにこう言われました。『あなたは生れ故郷に帰りなさい。わたしはあなたに幸を与える』と。わたしはあなたが僕に示してくださったすべての慈しみとまことを受けるに足りないものです。かつてわたしは、一本の杖を頼りにこのヨルダン川を渡りましたが、今は二組の陣営を持つまでになりました。どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄は攻めて来て、わたしをはじめ母も子どもも殺すかもしれません。あなたはかつてこう言われました。『わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を海辺の砂の

ように数えきれないほど多くする』と。」（創世記32章10節～13節）

ヤコブは自分の半生を振り返った時に、神様が、自分のような父と兄を欺き苦しめた者を見捨てず、味方し、溢れる恵みをくださったことが不思議でなりませんでした。再びヨルダンの岸辺に立った今、あの日の杖一本しか持たない、無一物の憐れな逃亡者に過ぎなかった自分の姿が甦ってきました。

この罪深い自分を、神様は何故にここまで愛し、祝してくださったのか。ヤコブは神様の御心の不思議、その一方的な愛に心打たれるばかりでした。

今、ヤコブは神様の前に、幼子のようになって全身で訴えました。**「どうか、兄エサウの手から救ってください。」**

ヤコブはその夜、エサウへの贈り物である家畜の集団、そして全家族、僕たち、家畜の大集団をヨルダン渓谷ヤボク川の渡し場を渡らせました。そして一人、神様に祈るために渡し場に残りました。彼は必死に祈りました。

その時、何者かがヤコブに襲い掛かって来ました。ヤコブの性格は慎重で計画的なので、力は強くないのではないかと想像するのですが、彼は井戸にかぶせてある、大きな数人がかりで動かす石を一人で動かしていますし、羊飼いの仕事は厳しい自然の中での仕事です。そして、羊を襲う野獣とも闘わなければなりません。ですからヤコブは、とても屈強な体格の持ち主となっていて、闘いには自信があったと思われます。

ヤコブは初め、相手が何者か、突然のことで分からなかったのですが、格闘を続けていく中で、相手は自分に勝る、力ある存在であることが次第に分かってきました。自分が全身全霊でぶつかって行っても、相手は自分を攻撃するのではなく、力強く受け止めてくれることを感じました。夜の暗闇の中、相手の顔は見えないのですが、神の使いに違いないと思えてきました。

自分はもうエサウに殺されるかも分からない。それはみな、自分の犯した罪の故であり、兄エサウに赦してもらいたい一心でした。でも自分の力では兄の心を変えることは出来ません。神様だけが兄の心を変えてくださるお方です。今、格闘しているこの神の使いは、その力、その祝福を与えることができる存在なのだと感じました。祝福を受けるまでは、この手を離してはならないと、ヤコブは必死に神の使いにしがみついたのです。

次第に夜が白みかけて来ました。神の顔を見た者は死ぬとされていました。ヤコブを死なせるわけには行きません。そこで神の使いはヤコブの股関節を外して、これ以上格闘できないようにして、**「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」**と言ったのです。しかしヤコブは**「いいえ、祝福してくださるまで離しません」**としがみつきました。すると、神の使いは**「お前の名は何というのか」**と尋ねました。彼は素直に**「ヤコブです」**と答えました。

ヤコブ、それは生まれた時から彼の生き方を表す名前でした。押しのける者、陰謀をたくらむ者、乗っ取る者、という意味があり、**「わたしは押しのける者なのです。兄を押しのけ、周りを押しのけてきた罪人です」**という告白が込められていました。ヤコブは神の使いと格闘し、神様の

前に立つことによって、素直に自分の罪を認め、心から悔いて、罪ある自分を委ねました。

すると神の使いは

「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」（創世記 32 章 29 節）と思いもよらない言葉が返ってきました。

イスラエルの元来の意味は**「神は闘う」**でしたが、後に**「神が支配される」**という意味になりました。

神様の名代である神の使いが、人間ヤコブに負けるはずはありません。神様は必死に神様を求め、自分の罪を自覚し、その解決を神様にすがりつくヤコブを慈しみ、憐れんでくださいました。夜が明けて、ヤコブが神の使いの顔を見て死ぬことがないように、**「お前の勝ちだ」**と言ってヤコブを離されたのです。

パウロが

「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」（コリント第一 1 章 25 節）と言っている通りです。

ヤコブは神の使いから新しい名前をもらい、新しく神様に支配される存在に変えられたのです。ヤコブは**「どうか、あなたのお名前を教えてください」**と尋ねました。神の使いは**「どうしてわたしの名を尋ねるのか」**と言って、ヤコブをその場で祝福してくれました。祝福することによって、その正体は神の使いであることを明らかにして去って行ったのでした。

神の使いが姿を消すと、ヤコブは大変なことに気が付きました。神を見た者は死ぬと言われていたのに、自分は生きている、いや、生かされている。その祝福に、驚きと感動を覚えました。ヤコブは思わず

「わたしは顔と顔を合わせて神を見たのに、なお生きている」(創世記 32 章 31 節)と言って、その場所を**ペヌエル（神の顔）**と名付けました。

ところで、完全な聖と義、愛であられる神様に対して、人間はあまりにも罪に汚れています。そのことは太陽の輝きに人間は近づけず、近づくことは死を意味することと同じです。

ヤコブは肉体の目で神様の顔を見たわけではありません。神様は霊なる御方です。ヤコブは犯した罪故に、不安と絶望の暗黒の中で、神様に救いを求めて必死に祈ったのです。神様はヤコブを受け入れてくださる証明に神の使いを送られ、そこで、祈りの格闘がなされたのです。暗黒の真夜中から夜明けに向かって、ヤコブが必死に神様のみを求めていった時、心の闇も次第に晴れて白んで行ったのです。その闘いはヤコブにとって、神様の顔、即ち神様の御人格、愛、赦し、導き、守り等、慈しみとまことを深く心に感じ、実感する出来事でした。

ヤコブは股関節を打たれ、自由に歩くことが出来なくなりましたが、それこそイスラエル、即ち神は闘われる、から神は支配されるに変えられた、自分の力で生きるのではなく、神様に支配され、導かれて歩むヤコブに変えられた姿でした。

神様はそのヤコブに、兄エサウとの和解をお与えになります。ヤコブに罪の赦しをお与えになったのです。

今日、ヤコブに等しい、自己中心で罪深い私たちも、神様の顔を見ることが出来るのでしょう

か。神様は私たちに神様の顔、つまり御人格をはっきり見せようと、御子イエス様を、肉体を持った同じ人間として、歴史の只中に送ってくださいました。

イエス様はヨハネによる福音書 14 章 9 節で

「わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示しください』と言うのか。10) わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか」と言われました。

神様はご自身の顔、即ち全人格を人間に分からせるために、イエス様を人の世に送られました。イエス様の愛と憐れみは、神様の愛と憐れみを表すものでした。その最も大きな愛は、生まれながらの罪人であり、罪に滅ぼされてしまうほかなかった人類のために、その罪を一身に引き受け、身代わりの十字架にかかって人類を贖ってくださったことです。私たちが心の奥深く隠している誰にも言えない罪、私の存在を滅ぼしてしまう罪を引き受けて十字架にかかって償い、神様の赦しを与えて下さいました。

神様は御子イエス・キリストを人類にお与えになることによって、ご自身の顔、その人格、全存在を見せて下さったのです。

私たちは今日、肉体の目では見ることが不可能な神様の御顔、即ちその存在を、イエス・キリストを通して見ることができるのです。神様は私たちに、そのイエス様と祈りによって顔を合わせることができるようにしてくださいました。確かにそれは、今はおぼろげですが、コリント人への第一の手紙 13 章 12 節に記されているように、**「その時には、顔と顔を合わせて見る」**ことになるのです。

私たちは、イエス様と祈りによって顔を合わせ、罪を悔い改めつつ、自己中心を砕いて頂き、神様に支配される道へと導いて頂けるのです。神様が与えてくださる大いなる祝福です。この祝福を手離すことなく、共に祈り励まし合って参りましょう。

お祈り致します。

慈しみとまことであられる天の父なる神様。神様の顔を見ることは死を意味した私たち人間に、ご自身の御顔そのものであられるイエス・キリストをこの世に遣わし、私たちの罪を十字架で贖い、赦しをお与えになったばかりか、イエス様に近づき、顔を合わせて祈ることが出来るようにしてくださいました。神様の慈しみとまことに心から感謝致します。私たちを、更にイエス様に近づき、顔を合わせて祈り、神様に支配される者としてください。

主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。　　アーメン。